

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

男は 痛い !

國友万裕

第33回

『泣くな赤鬼』

1. 修学旅行を取り戻したアメリカ旅行

8月の終わりから9月にかけて、キリスト教の教会の人たちとナッシュビル・ツアーだった。俺はアメリカが好きだ。今回久しぶりに大嫌いな飛行機に乗る決心をしたのは、目的地がアメリカだったからこそで、他の国だったら行っていない。予想していた通り、飛行機の中は大きく揺れることもあり、足が地についていないような気持ちで長時間乗るというシチュエーションはどうしてもリラックスできない。エリカ・ジョングの『飛ぶのが怖い』には、リラックスして気を緩めた瞬間に飛行機が墜落するような気がして落ち着かないという主人公の心理が描かれているが、まさしくこの部分はまとを射ている。今回、乗り換えの待ち時間込みで片道20時間の旅だったので、飛行機の中で寝ようと思っていたのだが、結局一睡もできず、6本も機内映画を見てしまった。

ナッシュビルについてはひとまずはリラックス。アメリカの生活を楽しんだ。ほとんど毎日のようにパーティーが開かれ、バーベキュー、ピザ、ソーセージ、カリカリベーコン、ハンバーガー、ビスケットと大体いつもメニューは似たようなもの、さらに、ドーナツ、ケーキ、アイスクリームとなる。アメリカのスイーツは日本の10倍くらいの甘さで、甘いものが好きな俺でも半分残してしまうほどだ。こういう食生活だから、アメリカの男たちは骨格はガッチリしているものの、お腹がポッカリ出ている人が多い。俺は日本人でありながらそういう体型なので、ツアーで一緒だった高校生の男の子からは、「國友先生だったら、負けていないですよ」と言われたも

のだ。「俺はアメリカ人体型だ」と思って嬉しくなった。

冷房が寒いくらいに効いているもの嬉しかった。俺は暑がり、寒がりの人と同室にいるのは極めて難儀である。寒い時は何か羽織ればいいわけだから、寒がりの方が暑がりの人に合わせればいいとずっと思っていた。アメリカはまさにその発想なのだろうか。やはり、俺はアメリカ向きなのだ。

マーティン・ルーサー・キングの博物館に行った時はさすがに重いものがのしかかってきたが、アメリカ南部とはいっても、日本人に対する人種差別はとりたてて感じなかった。ナッシュビルの街中で、黒人の若い男性に絡まれそうになったが、「あれくらいだったら、難波でもいるから」とツアーで一緒の大学生の男の子から言われた。

アメリカ行きは初めてではない。20歳の頃に1ヶ月間、ロサンゼルス郊外にホームステイをし、24歳から25歳にかけてワシントン州のカナダに近い田舎の大学の男子寮で、交換留学生として1年間過ごした。思えば、あの頃はまだ言葉もできなかつたし、文化や社会のことも何もわからず、ただ若さだけで乗り切ったようなものだった。その後30年という長いブランクを経てのアメリカ旅行は、俺の方があれこれ学んできたせいで、カルチャーショックも大きなものはなく、スムーズに過ぎていった。

わずか7日間の滞在だったが、小さな気づきはいくつかあった。ケーキは日本のように立てて出すのではなく、寝かせた状態で出す（これは日本に帰ってからアメリカのやり方であることを知った）。南部では、バーベキューサンドをわざと行儀悪く手で食べるのがエ

チケットである。アメリカ南部の人は、サザンホスピタリティと言われ、親切だと言われているが、事実、車でおくってくれたり、洗濯をしてくれたり、無償で人助けをしてくれる。やはり「クリスチャンだからしてあげなくてはという意識があるのかなあ」と牧師の先生に話したら、「意識して親切にしているのではなく、クリスチャンだと自然に親切にする気持ちになっていくのですよ」と言われた。

アメリカは空が広い。アメリカの広大な自然を目にするとキリスト教が根付く理由もわかるような気がしてくる。これだけ大きな空を見て過ごしていたら、空にいる神に思いを馳せたくもなるだろう。アメリカの自然は陰しい。それは人生の陰しさと重なり合う。仏様は、解脱して、安らぎの表情を浮かべているが、キリストは苦悩の表情を浮かべて、十字架にはりつけられている。人生は死ぬまで苦悩なのだ。そこも俺に向いているのかもしれない。俺は常に苦悩して生きてきた。でも、自分をキリストとなぞらえれば、俺は極めてキリストに近い人生を歩んでいることにもなる。

今回参加者はおじさんが俺を含めて3人、あとは若い子ばかりだった。アメリカに発つ前日は、大阪の教会の施設に雑魚寝。アメリカに着いてからは、公共の交通機関がないので、全員でヴァンに乗って、ハイウェイを何時間もハイスピードで走っていく、「トイレに行きたい人はいつでも言っていいですよ」と言われるのだが、「トイレに行きたい」と言ったところで、15分くらい走らなければ休憩できるところはない。危うく膀胱炎になるかと思っただけだ。ナッシュビルでは、ホテルに滞在し、その間韓国人の牧師さんと相部屋だ

ったのだが、アメリカから帰る直前の振り返りの会で、「相部屋だと聞いていたので、大丈夫かと思っていたのですが、普通のおじさんと言うよりも、まだ青年のような人で」とその牧師さんは俺のことを評してくれた。青年のようなおじさん！笑、俺はいつだって、そう言われる、そして、それは俺のアイデンティティと合っているから、言われて悪い気はしない。この牧師さん、普段はジョークばかり言っている人なのだが、真面目に俺のことを見ていたみたいだった。さすがである。大きな目玉としては、かつて日本で活躍していたプロ野球選手のマートンに会って、サインをもらい、写真も撮った。帰国後はMKタクシーの乗合バスでドアトゥドアの送迎をしてもらい、無事家路についたのだった。

たっぷり、修学旅行気分を味わった。俺は不登校で修学旅行には行っていないので、まさに40年遅れの修学旅行と行ってよかったかも知れない。しかし、もう行かれないだろう。今度行くとしたら、ビジネスクラスで行かなければ、エコノミークラスは俺の歳になるとしんどくて乗ってられないと思った。まだ行ける体力があるうちに、果たせなかった修学旅行ができたことに感謝したいと思う。

2. また過去に囚われている！！

アメリカから戻った後、実家に3日ほど帰った。母や弟に会うために帰ったのだが、家にいても何もすることは無い。近くの映画館で映画を2本観た。『人間失格』と『台風家族』。両方とも特別観たかった映画ではなく、実際、特別好きな映画ではなかった。ただ、たまたまサービスデーで映画は安かった。オープン

したばかりの大きなモールの一角にできたシネコンで、オープンキャンペーンで割安料金となっていたのだ。

オープンしたばかりで、他のお店やスポーツクラブもキャンペーンをやっているせいか、とにかく人々である。子供を抱えているお父さんの姿も見かける。九州とは言っても、昔とは変わった。だんだんと都会化してきているし、男女間の敷居も低くはなっているのだろう。今となっては、高校もかつては女子校・男子校だったところが、ほとんど教員化されてしまっている。

夜は叔母とその娘である従妹とその高校生の息子がやってきた。従妹はシングルマザー。まだ20代半ばくらいでシングルマザーの道を選んだ。とは言っても、相手の男が結婚してくれないから、泣く泣く未婚の母になったという口ではない。そもそも叔母さんが元祖できちゃった婚で、婚前交渉が憚られる時代に悪びれもせず従弟を作って、結婚歴も2回である。そういう奔放なお母さんに育てられているから、従妹は確信犯的にシングルマザーになった。まだ出産に焦る年でもないのに、どうしても子供が欲しいと最初から男に頼る気もなく、息子を産んだのだった。

彼が小さい時は、俺はお父さん代わりに、可愛がって、おもちゃを買ってあげたりもしたものだ。ところが今は高校生で、身体も俺より大きい。昔みたいに可愛く慕ってくるようなこともなく、黙って、座っている。彼が通っている学校は俺が一応3日だけ通って1年で中退した学校である。弟もこの学校の出身者なので、夕食の席ではあれこれ高校の話が出てきた。

「俺たちの頃はあの高校の先生たち、国立

大学に行かせることばかり言っていたからね」と弟が言った。確かにその通りだった。3日くらいしか行っていないのに大きなことは言えないが、入ってすぐに「国立、国立」だった。当時の俺は、東京志向が強く、東京の大手私大に行きたいと思っていたから、その部分にもズレを感じたものだった。

従妹の息子はバレー部に入っているとのことで、それなりにアクティブに高校生活を送っているみたいだった。今は高校も相当入りやすくなっていて、ほとんど落ちる子がいないという状況らしい。従妹の経済状態から考えて、大学にやるのは難しいだろうから、商業高校に行った方が良かったように思うのだが、従妹は息子が生きがいのような人生なので、どれだけの借金をしてでも大学にいかせたいと思っているようだった。

俺は彼らの話を聞きながら、だんだんと不愉快になっていき、ほとんど会話に参加せずに隅で考え込んでいた。従妹たちが帰った後、「高校の話になったから、嫌な気持ちになったんでしょ？」と母から言われた。

そうなのだ。学校から逃げ帰った日々。誰もわかってくれなかった日々。あー、また過去のトラウマが湧き上がってくる。

この夏休みには埼玉の叔母の家にも行った。俺が来るというので、従弟の家族も呼んで、一緒にホームパーティーだった。従弟の娘は高校一年だが、成績がいいらしく超名門の大学を目指している。彼女の高校は予備校みたいなところなのだそうだ。彼女は将来に対して前向きで大人びている。俺はこの年頃の頃、学校にもいけず、受験勉強どころではなかった。この時も、嫌な思い出が湧き上がってきた。2、3年後、彼女が超一流の大学に合格し

たりしたら、また嫉妬の思いが湧いてくるだろう。その心の準備をしておかなくてはならない。

一流大学出の人の中には大学のブランドでその人の能力を判定してしまう人もいる。実際には受験の頃に、勉強しようにもできない悩みに囚われていた人だって大勢いるはずなのだが、そういう個人差は考慮してくれない。人間は冷淡、社会は理不尽なのだ。

従弟の息子はまだ中学生だが、勉強嫌いで、それに極度の偏食で肉しか食べないという。野菜はおろか、果物も食べないらしい。

「8000円も給食費を払っているのに、給食はほとんど一口しか食べないで、家でガッツリ食べるから、もったいないのよ」と従弟の嫁さんが話していた。

彼はその時、学校のことで悩んでいた。「明日は土曜日で休みだけど、上履きを取りに行かなきゃいけない」と言うのだ。「大丈夫よ。明日取りに行けばいいんだから」と従弟の嫁さんがなだめていた。上履きくらい忘れてもいいような気がするのだけど、先生がうるさく怒るらしくて、彼はそれが鬱陶しくて、どうしても取りに行かなくてはと思っているらしい。

今時、学校の管理状況はどうなっているのか。俺たちの頃の学校の管理体制は今考えれば明らかに犯罪だった。また怒りが湧き上がってきた。俺は出会いや巡り合わせが悪かったのだ。俺の人生は大学までが目一杯出会いが悪く、それ以降は人生を左右するような悪い出会いがあったわけではない。それに歳を取るごとに尻上がりに運勢は向上している。友達も今ではたくさんだ。なのに、若い頃に失ったものが大き過ぎて、今でも俺は痛恨の

思いを抱えている。

アメリカの大作家フィッツジェラルドの名作『グレート・ギャツビー』のラスト。主人公のニックが故郷の中西部に戻るときに、「過去へ過去へと押し流されながらも、流れに向かって突き進んでいく」ことに思いを馳せる。思えば、俺とニックは逆だ。彼はニューヨークに出たことで、故郷の中西部が自分のアイデンティティであることを知るのだが、俺は京都に来たことで、俺は故郷には戻れないことを思い知った。それが俺のアイデンティティなのだ。過去に押し流されながらも、確実に進歩はしてきた。俺の人生、これからせいぜい、20年から30年、この間、大きな変革が起きることはないだろう。人生のストーリーはもう出来上がろうとしているのだ。迷いはたくさんあったけど、京都暮らしを貫いたことが俺の人生のドラマを完結させようとしているのだった。

3. 断捨離できない！

このところ、スポーツクラブに行かれない。毎月、月謝を払っているのにまだ今月は1回しか行っていない。今月だけじゃない。このところずっとこういう状況が続いている。お金を払っているのにもったいない。これだとビジター料金で通ったほうがはるかに得だ。しかし、俺はやめられない。前に心療内科の先生にそれを話した時に、「私も、保険みたいに入っていた時期があったよ」と言ってくれた。確かにその通りで、俺にとって、毎月のスポーツクラブの会費は保険なのだ。一回やめてしまうとずるずる行かなくなる、会員の状態でいれば、いつからでも再開出来る、そ

ういう思いがあるため、経済的に損失だということがわかっているけど、やめたくない、断捨離したくない。

それに、しばらく泳いでいないと泳ぎ方を忘れそうな気がする。もう30年くらい前だが、当時通っていた水泳教室の先生が「泳ぎは一回習得したら絶対に忘れませんから」とおっしゃっていた。その通りなのだろう。しかし、心配なのだ。せっかく水泳で運動コンプレックスを解消したのに、できなくなったら、また運動音痴に戻ってしまう。

なぜ、行かれないのか。忙し過ぎるからだ。俺は非常勤なので、仕事をいっぱい持っておかななくては、不安だ。実際、仕事が減った38歳の時は苦しかった。多く持っておけば、仮に減ったにしても、どうにか生活できる。

時間を断捨離できないのも俺の悪いところだ。俺は周りの人から30分早い男だと言われる。仕事にしても待ち合わせにしても30分早くに目的地についてしまう。いや、1時間早い時もある。そのため手持ち無沙汰で過ごしてしまう。もっとギリギリまで眠って、それから仕事に行った方が効率的だ。体力の省エネにつながるだろう。

映画も断捨離できない。とりわけ、サービステーなどは律儀に観に行ってしまう。本数観ればいいというものではない、むしろ、有益な映画を繰り返し何度も観た方が遥かに映画の勉強にはなるだろう。それがわかっているけど俺は、話題作はくまなく観るという習慣から抜け出すことができず、特別観たくもないようなものまで見てしまっている。

潔癖症も断捨離できない。俺は図書館にしてもレンタルDVDにしても返却を遅れた記憶がほとんどない。よほど人気のある本だっ

たら話は別だが、予約の入っていない本であれば、大幅に遅れるのでなければ、誰かに迷惑をかけるというのでもない、DVDにしても延滞金を払えば済む。それがわかっているのに強迫的に期日より大幅に早く返してしまう。

そうだ、食費も、マッサージ代も、断捨離していないなあー。無駄なものを断捨離していたら、今頃、マンション1つくらいは買っていたのかもしれないのだ。俺は非合理的で、不経済な性格なのだ。

4. うざいキャラ

結局、俺はどうでもいいようなことを悩んでいるのだ。過去のことは今更どうすることもできない、基本的な性格も治らない、それに俺が悩んでいることは、今現時点での悩みではないので、差し当たり、どうであっても構わないのだ。これくらいのことは悩みにも値しないだろう。誰にも迷惑はかけていない。この性格は治りそうにもないが、治らなければ治らないで、その性格と付き合いければいいのだ。もうこの歳だもの。付き合い方はわかっている。

今の俺には切迫した悩みはない。それで過去の繰り返す言を反芻するという悪循環に陥っている。考えてみれば幸せな人間なのだった。俺は仕事で一緒の先生たちから、うざいと言われる。常にグチグチ言っているのを聞いている方は面倒くさくなってくるらしい。しかし、この性格も悪くはないかということが最近わかってきた。

俺の部屋にはテレビがない。去年だったか、ついに断捨離してしまった。しかし、この頃

は便利な時代で TVer で見逃しネット配信が行われていて、放送後1週間くらいは配信されることになっている。このおかげで、俺は、『俺の話は長い』を見ることになった。生田斗真の主演で、引きこもりで無職の主人公とその家族を描くコメディである。このタイトルの通り、この主人公がとにかくうざいキャラで、どうでもいいようなことに拘って、理屈ばかり捏ねている。本当にうざいのだけど、その彼の理屈が面白い。

そういえば、『おっさんずラブ in the sky』も TVer で観ているが、このドラマで田中圭が演じる主人公も超うざい。ことあるごとに大きな声を出して、騒ぐやつだ。しかし、このドラマも大人気。田中圭はこれで大ブレイクだ。

「國友さん、メディアに出たらどうですか？ そしたら面白いから人気出るかも」と友人から言われた。俺みたいなキャラの人間は、テレビとかで距離を置いて見る分には面白いと思ってもらえるのだろう。そう考えれば、まんざら悪い性格でもない。むしろ現代のメディアの男性像の流れに合っているのだ。昔みたいに「男は黙って」という時代じゃない。うざい男性の方が視聴者にカタルシスを与えてくれる。

あー、またいつもと同じような話になってしまった。ただ、久々のアメリカ旅行は大きな出来事だった。そして、何も特別困ったことは起きず、平穩無事である。次の連載まで何か起きるだろうか??? 起きた方がいいのか? 起きない方がいいのか? 運命にお任せである。

5. 『泣くな赤鬼』(兼重淳監督・2019)

この映画、先生と生徒のドラマだというので、最初はひいてしまった。堤真一が演じる先生は野球部の顧問で、赤鬼というあだ名からも推察できるとおりで、鬼のような高圧的な先生。昔風の体育系の先生という設定になっている。とは言っても、それは過去の話で、今は野球には熱心ではない高校にいるので、なんとなく元気がない。その彼が、病院で偶然にかつての教え子（柳楽優弥）と再会し、もう一度彼と向かい合うことで、かつての自分たちの関係を振り返る話となっている。

回想場面では、案の定、赤鬼先生が、生徒を怒鳴ったりする場面が出てきて、こんな先生を美化するドラマになるのかと幸先不安なスタートだった。しかし、映画が進むにつれて、徐々にそうはならないことがわかってきた。彼が再会した教え子は不治の病で余命いくばくもないのだが、高校時代、赤鬼先生に一人だけ反抗する生徒で、野球部をやめ、学校もやめてしまう。この彼と赤鬼先生との関係が話の焦点となるわけだから、鬼のようなワンマン先生を肯定するのではなく、自分と対立した男子生徒との関係を通して、この先生が自省的になっていく話なのだ。

何よりも、野球部の優等生で、今は真面目なサラリーマンとなっている別の教え子に会いに行く場面で、「俺たちは先生の夢を実現するための道具だったんだ」というセリフが出てくるのが気に入った。彼は先生に大人しく従っていたタイプなのだが、しばらく立って考えた後、やはり、鬼の先生の指導方法にはどこか問題があったのだということに気づくのである。

この連載にも何度も書いてきたとおり、俺

を不登校に追い込んでいった立役者は、中学の時の体育の先生である。その先生は当時20代の後半で、最終的には地元の中学の校長となったと聞いている。もう定年退職しているはずだ。俺はこの先生が校長になったことがわかった時にやりきれない思いが湧いてきたものだ。俺だったらこの先生を懲戒免職にしたい。彼がしていたことは今だったら、立派なパワハラ、モラハラであり、男子生徒に男性性を強要するセクハラ行為でもあった。結果、俺は魂を壊された。俺の魂を壊した人が、校長の座までのし上がるということは許せない。

せめて、このドラマの堤真一のように、自分がしたことを反省してくれているだろうか。あれから40年、あの先生だって、その間には山あり谷あり、教師としての様々な波風を通り越してきているに違いない。40年前とは違って、不登校になる子はたくさんいる。運動部も昔みたいなやり方では問題が起きるだろう。それを乗り越えて、あの先生も成長したのだろうか。そのことをもはや確かめることすらできないのだ。この先生へのわだかまりは一生俺の心から消えそうにもない。死んだ後で、神様が審判を下してくれることを祈るしかない。

女性たちにわかって欲しいことは、男性性の塊のような体育教師に威圧されれば、男子生徒たちは、その先生に従わざるを得なくなるとのことだ。中には、この映画に出てくるかつての優等生のように、どこか違って、俺たちは先生のおもちゃにされていると気づきながらも、圧力に負けてそれに従う他なかった男子も確実に存在するのだということである。

この映画で面白いのは、赤鬼と死にゆく教え子のアンビバランスな思いである。赤鬼は赤鬼で、教え子は教え子で、お互い反発しながらも、どこか同性愛のように惹かれあっている。両者にとって、相手は自分が抑圧してきたものを体現する存在なのだろう。

俺を見下して、不敵な薄ら笑いを浮かべていた、暴君教師も、結局は自分の弱さを隠していたのかもしれない。一般にパワハラするようなタイプの男は、気は小さい。常に自分よりも弱い立場の人間に自分の強さを誇示しておかなければ、不安でたまらない。自分に従わない奴が一人でもいると自分のアイデンティティが揺らぐから、雷を落として、周りが抵抗できないような空気を作ってしまうのである。

死にゆく教え子は、彼のこの弱さに気づいている。だからこそ、赤鬼は彼のことが気になる。自分の心を見透かしているような存在への複雑な思い。それが同性愛的なものへと昇華するのである。

自分に抵抗したものが若くして死ぬことで、彼にとってのレジェンドとなる。この先生は、それを心のどこかに背負って、先の人生を歩むしかない。

俺に一生消えない傷を残したあの先生も、悔恨の思いを抱えて生きているのだろうか？この問いに対する答えは一生出そうにもない。